

誓願寺縁起六卷本の解題と翻刻

湯谷 祐三

一

浄土宗西山深草派の総本山誓願寺は、中世以来の念佛信仰の寺院として知られる。また、謡曲「誓願寺」の舞台としても名高い。誓願寺の由緒や靈驗を記す誓願寺縁起の諸本については、既に吉田幸一氏の分類があり、以下のごとくである^(註1)。

第一次本 尊経閣文庫本(十一巻本)

第二次本 (1) 統群書類従本・神宮文庫本・内閣文庫本

(2) 田中重太郎氏蔵本

第三次本 寛政四年板本

吉田氏の分類で特徴的であるのは、尊経閣本(十一巻本)をもって「本来のこの寺の縁起を伝へるものとして貴重なもの」と評価されたことである。その理由として、同氏は尊経閣本に和泉式部説話がないこと、各話について尊経閣本と統群書類従本とを比較したところ、後者は前者よ

り「詳細に敷衍されてをり」、「取意加筆の跡が歴然」としていることをあげられる。もつとも、尊経閣本は数話が一巻ずつ分巻されており、現存十一巻が完本である確証はなく、和泉式部と書写山の性空との説話は、既に筑土鈴寛氏が紹介されているように^(註2)、金澤文庫蔵の榊形本にあることから、鎌倉後期には形成されていたと推定され、一遍が和泉式部の亡魂を濟度する話も、寛正五年(一四六六)に演能の記録(糺河原勸進猿楽記)がある謡曲「誓願寺」に見られる。よつて誓願寺にまつわる和泉式部説話の淵源は現誓願寺縁起の成立以前に溯るものと思われ、その欠如をもつて尊経閣本の古態性の保証にはならないと考える。が、吉田氏の御指摘のように、尊経閣本と統群書類従本との間で、叙述に繁簡の差があることも事実であり、形態の面からも一話一巻であれば、説話の配列、取捨選択が容易で、長短様々な形の縁起が作成できることになり、寺社縁起が形成される過程を知るうえで、尊経閣本は興味深い伝

本である。

二

今回、誓願寺御当局の御高配を賜り、同寺に蔵されるいくつかの資料を拝見することができた。現在、同寺には各種誓願寺縁起を始め、勸進帳、願文等の誓願寺縁起の作成とも関連する資料が伝来している。それらを考慮した主な誓願寺縁起諸本の見取り図を次に示す。但しこれは新旧の区別ではない。

ア誓願寺縁起絵詞、誓願寺蔵、京都国立博物館寄託、三巻。奥書等はないが、室町後期の製作と見られる。同系統に神宮文庫本と、その転写本の翻刻と思われる続群書類従本や大日本仏教全書本がある。誓願寺にも詞書きのみの三巻本が現蔵される。

イ誓願寺縁起、尊経閣文庫蔵、十一巻、江戸前期写。各話一巻に分巻されているのが特徴。尚、同文庫には、このほかにアの系統の誓願寺縁起三巻が蔵される。

ウ誓願寺縁起、誓願寺蔵、六巻。アの系統に近いが、後述のような相違点がある。三十六人による分担書写、奥書等はないが、箱裏に元禄十二年の墨書あり。

エ真縁起、誓願寺蔵、一巻。奥書等はないが、天正二年の勸進帳と一具にされているが、料紙は異なる。アの系統の誓願寺縁起の原資料の面影を残すものと考ええる。『深草教学』第一九号に翻刻予定。

これらの諸本のうち、重要と思われる誓願寺縁起絵詞三巻や尊経閣本誓願寺縁起十一巻、誓願寺縁起六巻本など、いずれも紹介されておらず、今後の誓願寺縁起の研究のためには、これらの翻刻が急務と考ええる。よって今回は誓願寺に現蔵される誓願寺縁起六巻を翻刻することとする。

三

誓願寺所蔵誓願寺縁起六巻（以下六巻本と略称する）は、写本卷子本六巻、他に目録一巻が付属している。縦三九・〇センチ、界高三一・九センチ、一行二十字前後、漢字平仮名交じり文、料紙は厚手の鳥の子紙で金銀を蒔いた豪華なものである。整理記号は「イ28」、奥書等はないが、目録（翻刻参照）により本縁起が三十六人の法親王、公卿、高僧等による寄り合い書きであることがわかる。収納される木箱の蓋の裏には、「元禄十二龍集巳卯仲秋望日／縁起六軸 誓願寺常住／見住超然上人」と墨書があり、縁起の製作年代もこの頃と考えられる。

目録に名前を連ねる人々は、いずれも「公卿補佐」等で確認でき、寛文から元禄にかけて朝廷の中核にいたる人士であることが分かる。一例を挙げれば、第二巻の巻頭の筆者とされる堯恕法親王は、正保四年（一六四七）に妙法院門主となり、寛文三年（一六六三）に天台座主に就任している。目録では「妙法院堯恕」として、座主の肩書きを用いないことから、縁起の執筆は正保四年から寛文三年の間とも考えられる。『歴史奥抄』によれば、寛文四年に誓願寺草創一千年法会が行われていることか

ら、六卷本縁起の制作との関連が想定される。これは、目録の記述に導かれての推定であるが、この「考証」自体の信頼度も問題になる。とい
うのは、第六卷の五人目の筆者とされる飛鳥井雅豊は寛文四年に生まれ、
元禄元年に公卿に列している。このころには、前述の堯恕は天台座主で
あるわけで、目録の記述と矛盾する。目録作者の藤原貞維とは富小路貞
維（寛文八年生、正徳元年没）のことと思われるが、縁起筆者三十六人
の比定については、なにに基づくものであるか不明で、他の資料との比
較による検証が必要であろう。開創一千年法会との直接の関係も不明で、
今の所、箱書きにいう元禄十二年までに制作されていたものとしておく。
六卷本の本文構成は誓願寺縁起絵詞（以下三卷本と略称する）とほぼ
同じである。吉田幸一氏の分類をもとにして示せば次のようになる。

- 1 春日大明神の本尊にまつわる賢問子と天智帝の説話
- 2 天智天皇六年誓願寺建立のこと、寺号のこと、仏像安置のこと、奇
瑞の諸相のこと
- 3 桓武天皇平安遷都に伴い、誓願寺も勅使により移転のこと
- 4 醍醐天皇のご帰依のこと
- 5 源信僧都参籠の靈験と、二十五三昧式のこと
- 6 清少納言往生のこと
- 7 和泉式部と性空上人のこと
- 8 一条院の御宇、西国の海賊出家のこと

- 9 上東門院の写経のこと、参籠のこと
 - 10 沙弥円能と誓願寺六地藏靈験のこと
 - 11 承元三年四月の回禄のこと
 - 12 嘉禎二年九条道家仏事のこと
 - 13 一遍上人六十万人決定の付算をすること
 - 14 建治二年如来のお使いとして和泉式部浄土から影現のこと
 - 15 南朝の後胤、出家して真阿上人となること
 - 16 相国寺心了西堂のこと
 - 17 永享十年真阿上人往生のこと
 - 18 嘉吉二年郷の大夫貞氏現身往生奇瑞のこと
- このように、六卷本と三卷本とでは、記事の構成は同じであるが、各
部分において以下に述べるような相違点がある。構成表3の記事中に、
三卷本には「南京を山城国乙訓郡へ移させ給ふ時」に続いて次の文章が
あるが、六卷本にはこれがない。

天皇勅宣をくたし給ひけるは、誓願寺は天智天皇の御願にして本尊
は春日大明神の靈作、西方浄土の弥陀如来一体分身ましまして、衆
生済度のためにちかく此世に示現し給ふなれば、世に類ひなき靈像
なり

次に構成表10沙弥円能の話の冒頭部分に「西方の業を修せり」に続い
て、三卷本には以下の文章があるが六卷本にはない^{註3。}

或時、仰ありて薬師経の若聞世尊薬師瑠璃光如来名号臨命終時有八

菩薩乘神通示其道路といへる文を講す。円能これを聞ておもへらく、
葉師を念すれば西方の道路を示し給ふとなり

この部分は、典拠である『本朝新修往生伝』にもなく、三巻本における
増補とも考えられるが、「我則手をもつて地を模に果して堅く手すこしも
ぬれず」の次にある円能が頓死して見る極楽の描写はどうであろうか。

また八功德池を見奉るに、大宝蓮華あり。其花台の上に樓閣あり。
菩薩聖衆無数の諸天、音楽を奏して仏徳を讚し白鶴孔雀の靈鳥、声
を宝池の浪に和して、念仏念法念僧のひゞきをなせり。七宝の行樹
には七重の玉網をかさり、樹間の宮殿光をましへて玲瓏たり。無数
の菩薩は妙花をふらし虚空に往還して慈尊を供養し給ふ。我其功徳
莊嚴を一一みな拝して念々に恭敬せり。

この部分も三巻本にあり、六巻本にはないが、『本朝新修往生伝』には類
似した描写がある^{注10}。

次見宮殿、金銀瑠璃、七宝莊嚴、花鬘瓔珞、宝幢幡蓋、琵琶管篳
蕭笛歌唱之声、微妙清浄、孔雀鸚鵡、迦陵頻伽、共命鳥等、演説法
音、讚嘆仏徳、又有大宝蓮花、々中有樓閣、其上有菩薩聖衆、有人
語曰、此最少蓮花、下品下生所化也、一一見已、念々恭敬、

完全に一致するわけではないが、三巻本と類似する表現が典拠にもあ
るといふことは、この部分は三巻本の増補とは考えられず、むしろ六巻
本における削除の可能性を示唆する。同様の例は地獄での円能の会話に
もみられる。地藏菩薩の変化である比丘の「汝はいそぎ娑婆にかへり五

部の大乘経を書写し、猶も礼拝称名せば、必爰に生すへし」といふ言葉
に続く場面である。

汝若平生此願ありやとへり。我なしと答へぬ。さて次に閻宮を見
せんとてみちひき給ふに、刹那に王所にいたる。閻王も又、汝五部
の大乘経書写の願ありやと問給へり。我又なしと答ふ。時に比丘の
のたまはく、汝往年に人ありて彼経を書写せし法蓮に列座し、こゝ
ろに歓喜を發して、我もいつれの日かかくのことく此経を書写せま
しやと願望せし一念ありし故なりとのたまふ。其時思ひあたりて我
此事侍りぬと答ふ。比丘ののたまはく、しかなりしかなり汝報命い
またつきす、はやく本土にかへりて彼経をうつし、極楽世界に生す
へし

この文章も三巻本にあり六巻本にないが、『本朝新修往生伝』にはこれに
対応すると思われる部分がある。

僧語我曰、汝早帰本国、書写五部大乘経、果願更可往生也〔虫損〕、
兼問曰、汝有此願、不覺哉如何、答曰、不覺、爾時僧復曰、往年有
人、供養五部大乘経、円能適在其座、心中悲感、忽起供養経卷之志、
汝有此事哉、答曰、有之、僧曰、宿願是也、故曰、果願可往生矣

『本朝新修往生伝』は仁平元年(一一五一)の序をもつもので、大きな
異本の存在も知られていないことから、三巻本と六巻本の相違は、それ
ぞれの拠った『本朝新修往生伝』の違いに由来するのではなく、六巻本
による削除の可能性が高いと考えられる。

四

前節で見たような違いのほかに、三巻本と六巻本の間には異文関係にある部分がある。構成表15の真阿に関する説話の冒頭部分、三巻本では次のようである。

洛陽に南帝王の御子孫いまそかりける。十善の餘慶たつときのみに非ず、仏道の機縁あさからざるにや、或時思ひいてさせ給ひけるは、我れうけかたき人身を受け、得かたき王孫に生れたりといへとも、人間無常の理り遁るへきにあらず。縦ひ心にまかする五欲の樂あるも、還てこれ惡道受苦の因縁なり。無常のいつと定めなく、流転因果の遁かたき事をおもへは、名利更に益なく、如幻の榮花食るへきにあらず。かりの世のせんなき事にうちまされ、永き菩提を失はんこと返すく愚のいたりなり。唯急ても急くへきは出離の道、励ても励むへきは菩提の行なり。聞説出離の教門まちくにわかれ、何れもたうとき御法なれとも、我かこときの愚かなるものは、何れの法も成就しかたかるへし。爰に西方の教門弥陀の本誓をきけは、瑜伽三密の行法をもちからず、坐禪入定の工夫をも用ひず、只願生浄土の誠ありて、佛の號を称ふれば、賢不肖善惡男女をわかす、佛の願力に乗して往生せすといふ事なし。實に出離の志あらん人、誰かは是によらさらむと、深くおもひ定めたまひ、扱いつこの靈場にか身よせ、何れの本尊をか拜しなと思ひめぐらし給ふに、誓願寺は

誓願寺縁起六巻本の解題と翻刻

天智天皇の御祈願所、代々の主上叡信ましくて、感應不思議の尊像なる事を傳え聞き、即當寺に詣てたまふ。比は應永十七年の春、齡三十六歳なり。既に當堂に參詣ありて、當時の住僧または供奉の人々にも深く忍び、御連枝をいさなひ、御髻を落させ給へは、御連枝もおなしく墨染の姿となり、其名を宗玉となんあらため、共に當堂に引籠りたまふ。供奉の人々仰天し歎きあひけれども、二心なき御遁世のありさまを見奉り、みな涙をもよほし、あわれに貴き御發心かなと、なくく歸り侍りぬ。

これに対応する六巻本の部分を次に掲げる

此花洛に南帝王の孫裔いまそかりける(謙してつゝにその嘉名をあかさす)。戒急にして高姓の身を受たまふのみにあらず、乘猶急にして深く世は常なき事をさとり、朝には経を誦し、夕には仏をととなへとしなへに涅槃常樂の妙果をのみ志し求め給ひき。既にして或一日密に家弟を招て宣ひけるは、情世間の転変を案するに、八相苦燒の境界なれば、しはらく菩提を安すへきに非ず。縦令王位自在の身あるも、親疎の中に恒に疑懼の憂を懷き、衰滅時なふして至れば、劇苦下殊にことならず、それよりして下降、后妃臣民誰か実の樂みあらんや、愚者の愛樂は厭惡する所なり。我今不惑のよはひになんくとして、餘命の定なき事をおもふに、早に跡を煙竈に晦まし、身命を仏陀に帰投せむ事を嘆す。されは仏教多門なれとも、いつれも皆觀心得悟の法門なれば、吾儕下根無智の通入すへき道にあらず。

弥陀一教のみ末代に縁あるなれば、我掩して天智聖主の叡がんを追
感し靈験あらたなるに信帰して、偏に願を誓願寺の如来に繫たり。

今既に機縁相熟するにや、今夜頻に彼寺に入て、如来前にして剃髮
受戒し沙門の身となり一心に往生浄土の願行をみちなむと思ふ也と
有しかは、家第随喜して宣ひけるは、吾儕も年来終に願心を貯へ発
心修行の志し切なりといへ共、君の心を測り闕て、いまたその本意
を遂さりき。さあらは、我も共にあひしたかひて、同因同行の身と
なり、二世の昆弟ならむと、終に應永十七年の春、齡三十六歳にし
て、当寺に参籠ましくて、住持衆僧にも案内なく、供奉の面々に
も告知を給はず、連枝一時に髮を落し、染衣の身となり、堂内に籠
り給へは、供奉の人々、愕き歎きあひければ、二心無きありさまを
見奉り、各涙をもよほし、あはれに貴き遁世哉と、なくくあるし
なき館へ帰り侍り。又、家弟は寺主道禪上人に法名をうけ、宗玉と
なむ申侍り。年をかさねて真阿弥陀仏に随ひて、浄行を修し給ひけ
るか、微疾を感じ、瑞相ありて遷化したまふとそ。

両者を比較すると、「南帝王の御子孫」が世の無常を悟り、念仏の教えに
目覚め、阿弥陀如来に帰依するという同じ内容を述べているが、行文は
大きく異なる。これは相互に影響を与えあったというよりも、両者は別
の本文系統に属していると考えられる。前節で検討した沙弥円能の説話
では、六巻本の方に記事の欠如が見られたが、真阿の説話における現象
を考慮すれば、六巻本は、三巻本を底本にして絵の部分省略し文章に

削除改変を加えたものではなく、三巻本とは別の縁起の本文を書承して
いる可能性が高い。

六巻本の豪華な装丁や三十六人の貴顕による書写を考えると、六巻本
の作成には相当の手間と費用がかけられたことが窺われ、底本の選定に
あたり、既に存在していた三巻本を採用せず、敢えて別の本文を使用し
たことには、それなりの意図があるはずである。

今後は三巻本や尊経閣文庫本との更なる比較と、誓願寺縁起に含まれ
るそれぞれの説話の典拠関係の解明が必要であろう。

注

- 1 吉田幸一氏「誓願寺縁起と和泉式部縁起」(『文学論藻』第三十三号)
- 2 筑土鈴寛氏「復古と叙事詩」(昭和十七年)
- 3 三巻本の引用は誓願寺所蔵の写真による。
- 4 引用は『日本思想大系7 往生伝 法華験記』(一九七四年、岩波書店刊)により、一部表記を改めた。

(付記)資料の調査と翻刻を御快諾賜りました総本山誓願寺御当局に厚く御
礼申し上げます。

(誓願寺縁起六卷本翻刻)

凡例

- 一、 底本は総本山誓願寺所藏誓願寺縁起六卷である。
- 一、 字体は底本に近似するものを使用した。
- 一、 行の途中での改行はこれに随った。
- 一、 底本に記されている訂正はこれに随い訂した。
- 一、 割注は(へ)に入れて一行書きとした。
- 一、 私に句読点を付した。
- 一、 私に付した注は(へ)に入れて示した。

【巻一】

夫佛法は、王臣の帰敬によりて神光をまし、靈像は貴賤の渴仰に随て感應をあらはす。爰をもつてかたしけなくも、我牟尼尊教法を王臣に付属しては、行化を末劫にいたし、形像を後世に示現しては、利益を萬代に傳ふ。されは月氏の優填は梅檀を彫て真容をうつし、漢土の明帝は金人を夢見て佛法を興す。我朝のいにしへ

欽明

敏達の聖帝、遙に其風をしたひ給ひ、上宮、鎌足の賢臣とをく其塵を相継り。尔来靈區を華夷にしめて、名像の奇瑞所々にしるく、結縁のともから參詣のあゆみたゆることなし。就中當寺は
天智聖主の

御願にして

本尊は

叡感の瑞夢に因て成就し給ふ。誠に殊勝の道場、希有の尊像、化物他に異なり、誰か是を仰ざらんや。かゝる因縁を段々に記し、是を不朽に傳へ、利益を永代に残さむことを庶幾となむ。

(五行空白)

抑當寺は人皇三十九代天智天皇の御草創、累代勅願の梵刹、本尊は西方教主弥陀如来、慈悲万行の大菩薩。春日大明神の真作、雲験不思議の尊容なり。其濫觴は、昔大和國添上郡奈良の京にをゐて、日域無双の良匠あり。其の名を賢問子と号す。かれひそかにおもへらく、我今譽を和朝に得たりといへとも、猶願は名を大國にあらはさはやとて、既にして大志を企て遠く大唐に到けるに、唐の帝叡聞ましゝて、外國の良工を唐土にとゞめん事、一かたならぬ至寶なりとて、恩寵殊に浅からず。されとも彼おのか故郷忘れかたきならひにて、時々帰朝の色見えければ、帝抑留の勅使たひゝなりしかとも、更にとゞまるへきけしきもあらされは、叡慮をめぐらしたまひて、たけき武士の心をもなひかせんは色にしくはなしとて、美女を一人賢問子か妻にたまひぬ。されともなをわすられやらぬ古里なりければ、朝な夕な遙の雲路を打なかめ、郷情いやましなりしかは、帝猶かたく留給はんとて、浦々みなとくへ勅をくたし、しきりに渡海を禁したまひぬ。賢問子力およはずして、つくくと思惟しけるに、此上は舩筏に乗し、海上を行へき事、望をたえたる事なれば、

兎角空をかける鳥ならては、いかてか万里の蒼波をこゆへきやとて、深
 閨に引籠り、神妙の工夫をめぐらし、木をもつて鳥を造り、虚空を飛行
 して帰朝すへき巧をなしける。或時、妻女にむかひていひけるに、妹背
 の中も中／＼に、ふり捨かたき道ながら、故郷の方の恋しさに、かくは
 おもひたちぬるなり。夢のうき世はかゝるとも、他生の縁はたかはしと、
 涙なからにかきくときけるか、折しも彼妻懐妊し、いまた十月もみたさ
 りければ、汝かうみなむ子、女子ならは力およはず。若男子にても待ら
 は、父かしるしに是をあたふへしとて、一の鑿を渡しき。女房きこしも
 あへず、打恨みたるけしきにてかこちけるか、さてしも諸共に行へき旅
 の道ならねは、たかひにおしむ名残の袖、涙なからにひきわかれぬ。か
 くて賢問子、彼鳥の腹に入、両手をもつて両翼を操りかけりければ、恰
 も空飛鳥の粧ひにことならずして、万里の海上雲路を渡りて、日本の地
 にそいたりぬ。かの諸葛孔明か木牛流馬をあやつりしも、かゝる不思議
 の機巧にこそ。

(二行空白)

かくておつとの賢問子帰朝の後はことは忘れもやらぬ妻のこゝろつれ
 くなりし折からには、夫の行たる空をなかめあかしくらして過けるか、
 やう／＼日数かさなりしかは、ことゆへなくひとり男子を生しぬ。此
 子成人するにしたかひて、いふかりおもひ、或時、父はと尋けるに、母
 ありし昔をしか／＼と語り、是こそ父が形見そとて、一の鑿をあたふに、
 子これを聞よりも頓て心に思ひたち、急き扶桑に趣き、父にはやく對面

し、箕裘の業を継さんと願しかは、母のいひけるは、あかぬ別に、夫の
 契りをたつことも、汝一人をさりととも、たのむ心になくさみて、此年
 月をくりにしに、汝いま日本へ行なは、いつかは帰り来るへき。萬里の
 餘所に障なは、あひみむ事も覺束なしと、しきりに歎き留め侍れとも、
 思ひ立ぬるこゝろさし堅固なりければ、はや渡海をそ催しける。主上叡
 聞まし／＼て、父子の對面有へきと思ひ入たる心のうち、實に理は神妙
 なり。しかはあれと四百餘州の大國に六十餘州の日本をもものになそらへ
 くらふれば、日域の一嶋は纔に粟散芥子の小國なり。此國へわたるおの
 こなればとて、其名を芥子國と号せられ、一葉の船をかさり、水手楫取
 さし添て、水碧天にひたし、浪白雲にさかのほる。蓬瀛萬里の海上を日
 本へと渡したまへる。はる／＼とふりさけ見つる船路も時しあれば、ほ
 ともなく日本の地につき、大和國奈良の里にいたりぬ。胎内にてわかれ
 し父の面影なれば、何をしるへと尋ぬへきたよりあらねと、母のつたへ
 し言葉の末、一の鑿をしるしとして、こゝかしを尋ぬるに、天性父子
 の縁なるにや、終に父にめぐりあひぬ。古へ燕の太子丹か本國にかへり、
 蘇武か胡國に趣き二たひ漢家万里の月にかへるも、かくこそはありなめ
 と不思議なりし

こととも

なり。

爰に天智天皇はもとより聖主にておはしましければ、内には三綱五常の
 道をたゞし、外には万機百司の政、懈り給はず。四荒八極掌の中に握り

給ひしかは、四海風をのそむてよるこひ、万民徳に帰してたのしめり。
上君徳あきらかなれば、下臣礼をそむくことなし。嗣君金枝のさかへ、
時を得てめてたかりし御代とかや。かゝる明君にてましくけるゆへ、
猶有為無常のはかなきためしまておほしめし、わけさせ給ひて、宸襟を
めくらしたまふは、生者必滅の掟、佛もまぬかれたまはず。金輪聖王の
位、釋提桓因喜見城の衆も一夜のゆめのことし。大梵高臺の閣、いつも
の栖家ならず。天上の五衰、人間の八苦、三界無安猶如火宅のことはり
なれば、二十五有いつれの處にか心をとむへき。遅々たる春のあした、
南庭の花に戯れ、悠々たる秋の夕、西楼に月を詠せし遊客も、夢のうき
世のあたなれば、あしたの露のみすくも、夕の煙と消うせぬ。生死無
常の轉變は、誰かはひとり遁へき。妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と聞
時は、朕たましく今生の榮花をうけて、錦帳の内に心をたのしめ。玉臺
の床に身をやすんし、百官卿相に崇敬せられ、花月のあそひいとまなく、
けふは十善万乗の主と仰かるとも、あはれいつの夕にか北邸の露ときえ
なは、あすは果して奈落のそこに身をしつめ、重苦を受ん事目の前なり。
かくはかなき身をうけながら、むなしく生涯をくり侍らは、いつの時
か生死輪廻をたちぬへき。はやく佛道修行に心をかけ、菩提の道をねか
はさらめやとて、深く三寶に帰依したまひ、殊には弥陀如来本願不可思
議の利益を仰きたまひ、つゝに大誓願をおこし、現在に生身の弥陀如来
を拜せずは、畢命を期とすとて、錦帳に引籠り一心に念佛したまへは、
或夜の暁更に至て、二天人あまくたり、奏しけるは、まのあたりに生身

の如来拝覧の御のそみおはしまさは、賢問子、芥子國に仰て、丈六の座
像を造立したまふへし。是則西方の真身に均しからむと告畢て、虚空を
さして飛さりぬ。

時に天皇感應の告にまかせて、即賢問子、芥子國父子の佛師に勅命をく
たしたまふ。父子みことのりを受しより、各別に淨室をかまへ、半身を
わかちて作りたてまつるに、晝は一人の彫刻と見えしも夜に入ぬれば斧
鑿の響き、数十人に聞ゆ。諸人あやしみ壁の隙より窺ひ見るに、父とみ
しは六臂の地藏菩薩、子とおもひしは六臂の觀音菩薩にて、をのく無
数の眷屬光を放て暗室の中をかゝやかしたまひしかは、不日に造立こと
をはりぬ。かくて父子各半身を抱き来てさし合せけるに、かねていひあ
はせざりけれども凡夫の所作にあらされは、全軀圓滿にして、毫髮のた
かひなく、只一人の作のことし。天皇叡感のあまりに、如来御面相の裏
には、忝も震筆をそめ、朱をもつて六字の名号をしるし給ひ、又地藏觀
音の靈巧として御腹心の内には五色をわかつて五臟六腑をそなへ、十二
經脈をつりわけ、圓光の中には三世三千佛を作りつけて、三世諸佛依念
弥陀三昧成等正覺の状を表し、頂上肉髻の一相をかくし給ひしは、本よ
り十劫のむかし正覺なりし佛なれば、八萬四千の相好悉皆圓滿したまへ
とも、弥陀如来因中に設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不
生者不取正覺と誓ひ給ひて、一切衆生を一人も漏さず度し盡して後、衆
相圓滿の正覺を成せむとの大悲大願ましますは、虚空法界つきさるに成
佛したまふへきにあらねとも、薪いまた盡さるに、火捺すてに盡るかこ

とくして、衆生の往生にさきたちて、佛は正覺なり給へり。しかれども猶果上の尊容に未度の衆生を尽して、彼相好圓滿し給ふへき本願大悲の形をあらはし奉りて此一相をかきたまふなり。彼弥陀観音化尼化女となり来て織まします當麻曼陀羅の中央の本尊と、此地蔵観音化現して彫刻したまへる當寺の本尊と、ひとしく肉髻の一相をあらはしたまはさるごと、他に異なる靈像なれば、信心の聲、感涙肝に銘して拝し奉るへし。

しかのみならず、此尊容造立のうち、天皇みつから愛染の法を三千座までをこなひ給ひて、衆人愛敬利物廣大と祈り給へり。謹案するに、此尊像を春日大明神の御作と云事は、地藏観音は三笠山の御神の本地たるゆへなり。去寶龜年中に當寺の住持専貞法印、三笠山に七日の參籠をとけ、用心を抽て神慮の感應をあふかれけるに、第三第四の寶殿より地藏観音顯現し告給ひけるは、忝此山にうつらさりし前に、あらかしめ先此土に來て西方の真佛を模写す。則誓願寺の本尊是也。故に我每天彼寺に影嚮して鎮に寺内を守護す。汝なむそ勞敷遠くこゝに來て、我を求むるやと告了て、忽然として見えたまはず。しかれば天皇の叡信に酬て、末世の衆生をすくはむかために此尊容を造立し給へる神作、最分明なり。

(二行空白)

既にして、天皇四乙丑の年、此靈像造立なり給ひぬれば、主上御大願の本意を遂給ひ、一かたならぬ叡信たり。先假屋殿に遷し奉りしかは、大和并近國近里の道俗責賤、肩をやうし袖をつらね、市のことくに群集して世にありかたき靈佛を急き拝み奉らんと、拈香散花の精誠を尽し、撰

取の誓ひを頼奉りて、隨喜の涙をなかしける。

(一行空白)

同年の夏、急ぎ佛閣を靱建し奉るへきよし綸命降りしかは、公卿大臣詔をうけ、和州撰州の巧匠をめし、遠山近林の良材をよせ、吉日を選て斧をめぐらしけるに、大夏高堂の構なれば三年の功をそ累ねける。

【卷二】

同六丁卯年仲春上幹の比、成風の功積り、七堂伽藍の精舎成就しぬれば、天皇叡感ありて勅して誓願寺と號したまふ。おほよそ誓願の名は、自他兼濟の心を發してみつから其心を制するを誓といひ、満足を志求するを願といふなれば、いつれの諸佛諸菩薩もみな惣別二種の誓願を發したまふか故に、かならずしも弥陀如来の別願に限て誓願といふには侍らねと、殊に弥陀如来は諸佛の願にすぐれて、一切の善惡凡夫隔てなく撰取したまふ誓願ましますは、其悲願の妙なるを讚美して超世の願主と稱したてまつるなり。されは此寺を誓願寺と號し給ふ事、其謂れあり。弥陀如来は現其人前の誓願を捨たまはず、天皇の叡信に酬て、地藏観音の聖作にて當寺の本尊とあらはれたまひ、天皇は生身見佛の誓願成就ましゝて、奇異の尊像を感得したまふにより、佛の誓願と天皇の誓願と一時に符合して、建立なりし寺なればとて、御堂の額に誓願寺とはあらはしたまへり。さて境内を方九町にかまへて、九品の浄土をかたとり本堂を西正面に建て、日没の光をうけ弥陀佛國當日没處直西超過十萬億刹の方處にあ

て、外陣の左右に等身の地藏六體を安置して、此菩薩六道に遊戲し、受苦の衆生を教化して、即彌陀佛國に送りたまふすかたを表し、佛壇の裏板には、観音勢至二十五の菩薩を圖して、歌舞來迎の粧をあらはし、惣して堂内の莊嚴金銀珠玉をちりはめ、庭上には池を鑿り、白蓮を栽て八功德池をまなひ、北の方には、一の寶閣を建て、六臂の地藏、六臂の観音を鎮座に勧請せり。〈專貞法印、神託を蒙り給ひしより後、此二菩薩を神躰にあかめ、春日大明神を勧請す云々〉其外釈迦堂、講堂、多寶塔、輪藏、僧堂、方丈、庫裡、惣門、棧門、回廊、廊架、四十九院の塔頭、門外の大橋等に至るまで、善つくし美尽して修造したまひければ、兜率宮の四十九院、天竺祇園精舎の莊嚴もかくやとはかりおもほえて、見聞の人々感戴せざるはなかりけり。此寺二世安樂の勅願寺として、公田二百餘町、刈稻二十万束、永代に寄附し、惠隠上人を開祖として、三百餘の僧侶を置たまへは、同年五月中の五日に、天皇臨幸なりたまひて、遷座供養あるへしとて、其役をさためしめ給ひ、既に當日におよひて、主上道場の御簾の裏に渡御なりたまへは、月卿雲客みな階下に祇候せらる。伶人は御堂の庭の左右に幄を打て胡床に座す。其外參詣の貴賤、稻麻のことく集り、聴聞の緇素竹葦のことく群りて、九町四方の境内も處せきまで充滿たり。かくて法席時既にいたりぬれば、伶人は曲を奏し、大衆は梵唄を唱へ、願文説法いとありかたき供養なりければ、上は有頂天にも響き、しもは奈落迦にも徹しぬへくおもほえて、心耳をすます法の聲、聴衆の貴賤をしなへて、百八煩惱の眠をさまざまぬ人そなかりける。漸く

法筵終りなむとする時、壇上の本尊たちまち白毫より光明を放て、堂内を耀し給へは、瑞華空にみち、紫雲四方にみなきり、妙昔天にひゞき、異香堂内に薫して天人影嚮し天華をそなへ、禮拜讚歎なし奉りて、則天皇に奏していはく、當寺の本尊は極樂の眞身と一體なれば、眞假無二功德決然たり、可仰可信といひ畢て、飄然として雲をしのきて飛さりぬ。時に天皇みつから玉宸をいてさせ給て、五躰を地になげ、歡喜の御涙に御衣のたもとをしほりたまへは、近侍の卿相は云に及はず、庭上群集の道俗男女に至るまで、信心肝に銘して渴仰の頭地にふしける。〈此外奇異不思議、靈相あけてかそふへからず。委は〔スリケシ〕靈驗記に見えたり云云

昔優填大王、世尊を慕ひ、梅檀を彫て眞容をうつしたまひしかは、其像動靜起居したまふ事生佛のことくにして、花を雨し光を放て世尊を禮したまひ、又世尊祇陀林にましくて、弥陀經を説給へは、六方恒沙の諸佛御舌をのへて祥瑞をあらはしたまふ。今當寺の本尊も放光の奇端といひ、天人の證明といひ、一時の奇特不思議なれば、かゝるために殊ならす。これ西方の弥陀如来々應のちかひ、たかふところなくして、末世の衆生を益せんと、此寺に示現したまふこと疑なし。されはこの場に歩を運ふ人は、則七寶地をふむにひとしく、此本尊を拜するともからは、全く眞佛に値奉るに異ならず。誠に十萬億利遙なりといへとも、去此不遠の利益にあつかるなれば、誰か婦依崇尊の志を励まさゝらむや。且當寺はひとり天智天皇のみ勅願處としたまふにあらす。後代の聖主賢王世々

に追感ましく、度々に臨幸なり給ひ、后妃宮女おほくは、信仰の首をかたふけたまはすといふことなし。

(二行空白)

人王五十代桓武天皇御宇、延暦三甲子年、南京を山城國乙訓郡へ移させたまふ時、天智聖主の御願を追感したまひて、遷都の初に、まづ此本尊を遷したてまつり、天下安全寶祚延長を祈り奉るへしとて、ひとつの寶車を飾りて、本尊を乗せたまつり、道筋には、あらこもをしき、白布をのへ、勅使さきに立たまへは、伶人辻重久楽頭として、数たの樂人を引率し、道すから萬歳樂を奏し、住待衆相御車の前後をかこみ、供奉し奉る。大和一國の僧俗貴賤みちのちまたに充滿して御名残をおしみ、跡をしたひ馳集りて、我をそしと御車の綱に取付ものもあり、すゝむにくるゝ老弱もあり、聞を傳へに在々處々の土民まで、別を悲み落涙袖をしほりてをくりたてまつる有様、譬は釋尊御入滅の時、四輩の弟子、諸大菩薩、閻浮の諸王、大臣、長者、四天王、諸天子、八部諸王、山海諸王に至まで、万億恒沙の諸大衆、拘尸那城に集りて、悲嘆ありしに異ならず。漸く乙訓郡に近付は、此京の諸人、靈佛當地に遷りたまふことを隨喜し、盲龜の浮木にあへる心地して、我もくと出迎ひ、信心の頭を傾け、恭敬の掌を合せければ、さしにも廣き大路、足のたてともなかりけり。かくて王城の東北に當て、七堂伽藍を造立して、ことゆへなく安置したまへは、帝の叡信なのめならず。都鄙の貴賤參詣のあゆみ絶る事なし。

(三行空白)

人王六十代醍醐の天皇、延喜三癸亥年秋八月、贈皇太后御菩提の御為に宸筆をそめ、てつからみつから浄土三部經を書写ありて、忝も龍駕をめくらし、當寺へ臨幸あり給ひぬれば、公卿殿上人供奉の官人、門前にみちくたり。既に御堂に入御なり給ひ、御經讀誦ましくて後、大衆をあつめ無遮の大会をいとなみ、鄭重の御志を励み給ひしは、本師釈尊、摩耶夫人の御為に、切利の雲に昇て恩經をととき、大愛道尼の闍維には、黄金の御手にて牀の一脚を挙給に、慣ましますにや、いはゆる諸佛念衆生衆生念父母常念子々不念父母なれば、仏は大悲を心として、三界の衆生を一子のことくあはれみましますとも、衆生は迷惑不信にして、その教にしたかはす。親は慈愛深くして子を思ふ闇にまよふ事、上は王侯より下は士庶乃至禽獸昆虫に至るまで、いきとしいけるものは、天性みな爾なるに、かへりて子は父母を思はずしておほくは不孝なりけるに、此帝もとより聖主にして渡らせたまへは、かく精誠の御追善ありかたかりし事とも也。

叡山横川首楞嚴院の源信僧都、又は恵心院の僧都とも號す。大和國葛上郡当麻の郷の人なり。童兒の時、延暦寺にのほり、慈恵大僧正を師としつかへ給へり。天性聰明にして、しかも止觀の窓に眼をさらし、玄文の床にひちを(く)脱力)たき、螢雪の勤をこたりたまはさりしかは、住山久しからざるに、大藏の奥義をさとり、諸宗の淵源をきはめ、三塔の老若にすくれ、三千の衆徒にひいてましますは、天台の教法此時に盛に

して、業をうけ徳に帰するともから、其数をしらす。かくのこことく智徳兼備の高僧なりといへとも、顯密事理の修行は、利智精進の人の成すところ、頑魯の下機なんすれ所能これに堪むや、唯濁世末代の目足は、偏に往生極楽の教行なり。これ下凡誘引の捷徑なるのみにあらず。上聖猶欣求したまふところなり。されは、在世の普賢文殊も、願をおこして西方に生し、滅後の龍樹天親も、偈を説て浄土に帰したまふ。しかのみならず、晨旦には、惠遠法師蓮社を盧山の幽険にむすひて、西方の浄業を修し、本朝には上宮太子精舎を極楽の東門に擬して、無生浄土の直道をしめしたまふ。道俗貴賤たれか他力本願に帰して、往生をねかはざらんやとて、自行化他もつはら浄土門の闡奥を専要として、一期念佛其数二十俱胝（百億を一俱胝と云なり）一乘善根、事理の功德、みな極楽に廻向し給ふ。愛をもつて常に当寺の如来を渴仰ましくて、下山のたひこゝに参詣したまはさることなし。或時人来て僧都多年供敬の本尊拝し奉んとそのそみければ、年比一心に頼奉る本尊は誓願寺の如来そとこたへ給ひぬ。既にして、御年五十なりし時、当伽藍へ御参籠ありて、不断念佛を始め、淹留し給ふこと五十餘日、其中間に善財童子五十餘の知識に遇て、佛道を求めたまひし形相をみつから、五十餘幅に畫圖し、これを内陣にかけて毎日称揚讚歎したまひて、善財童子は、功德雲比丘の處にして甚深の念佛三昧を授受せり。今我等は当寺の如来を恭敬して、無上功德の弥陀三昧を修す。往生なんそ疑あらんやと演給へは道場の聴衆みな随喜の涙をもよほしけり。是を名つけて善財講と號す。即一卷の式をあ

み、此寺の龜鑑に備へたまふ。是を誓願講式といひ、又は六道講の式、又は二十五三昧の式とも名づく。自尔已来毎月三五の日、如来前にして、此式をとり行ひ、段々に弥陀の寶号を唱へて、六道受苦の衆生に廻向す。是すなはち僧都慈心の勸化なれば、誰人か仰信の掌を合せさらむや。

清原の深養父の孫、肥後守清原の元輔か娘、清少納言は一條院皇后の侍女たり。好色を本として露命のあへなき事をおもはず、愛欲を心として将来の恐あることをわきまへず、只染を春の花にたはふれ、思を秋の月によせ、花鳥の遊宴にのみ心をつくし、染を朝恩にきはめて、佛道修行の心さしは露斗もなき人たりしか、或時事の縁にひかれて當寺へ詣て、如来を拝し奉り、悲喜交流し、不思議に菩提心を發して、終に如来前にして、緑髪を落し、比丘尼となり、御堂の傍に菴室を結び、佛事を営む外敢て他事なく、御堂へまいる外更に他行せず。常修念佛の行者となり待りぬ。或時宮中よりめすことありければ、御返事とおほしくて則一首を奉る。其哥に

求めてもかゝる蓮の露おきて

うき世にまたはかへるものかは

かやうにつらねて大内へふたゝひかへらす。念佛日つもり、道心年ふかふして、臨終の刻、なを高聲に念佛し、奇瑞をのつから至り終に此寺にて往生の素懷を遂侍る。これ發心は時を得て熟すと云ながら、時又佛の加祐なればありかたかりし靈驗なり。

【卷三】

六十六代一條院の皇后、上東門院の侍女に和泉式部といひしは、越前守雅致かむすめ、和泉守橘道貞か妻女なり。故に夫の名によせ和泉式部とは申せしなり。もとより敷島の道に長し、好色世にすぐれ愛執いとふかくして曙晩人の心をのみとろかし花の春のあした月の秋のゆふへ、おりくくの思をのへて光陰をくくりしか、いつしか花の姿もさかりすぎ、齡三十餘りいつとせにをよふまで、後世菩提の事は夢にたもしらする所に、最愛の息女小式部の内待、かるからぬ病をうけぬれば、是をなげき佛神に延命を折りしかとも、そのかひ更になくして、既に命脈おとろへて今をかきりとおほしきとき、小式部母の手をとり涙をなかし、別をかなしむ風情にて、一首を詠しけり

いかにせむ行へきかたもおもほえず

親にさきたつ道をしらねは

からうして口すさみければ、さらぬたに人の親のころは闇にあらねとも、子を思ふ道にまよふならひ、老牛の犢を舐り、断猿の子を呼ぶにことならざるためしなるに、ましてあいしくしき一ふしにむね打さはきつせきあへぬ涙なからに和泉式部

小足にてたとり行らん四手の山

道しらぬとてかへりこよかし

かやうにつらねしころのうち、思ひやられて哀なり。実も別をとむるしからみなき世のならひ、あはれはかなくも、小式部の内侍十四歳にし

て終にむなしくなりぬれば、母の式部つらく浮世の常なき事を思ひつけ侍るに、老少不定は閻浮のならひ、愛別離苦は人趣のことはり、風葉のたまちかたき身、いつれの人かのかるへき。今日は小式部を送しも、明日は我身にせまりなん。かくはかなき夢幻の世に心をとむへきもあた成へしと、朝市の榮花念々にいとひ、捨子をさきたてじを善知識とこるえ、菩提のみちに趣き、いかなる智者聖人にもあひ奉り、出離の要法を尋求んと念願せる折ふし、播州書写山にまします性空上人は、法華修行の名徳、六根淨の貴僧なりとつたへき、いそきまみへ奉りて妙なる御法をうけ、すしき道におもむかんとて、終に我とひとしく佛道に心させし宮女八人をともし、夜半に宮中をしのひいて、菩提心をさきとして、齡三十五の秋、書写山へおもむきける。九重の内をたち出て、種もなかはの事なるに四方の山々さひしくて、あはれもよほす虫の音も、われをとふかと思ひ、草露けきそてのいとしくかはく間もなきたひ衣、日もかさなれば、程もなく書写山へつき待りぬ。

性空上人は多年法華修行の功つもあり、六根清を得給ひし故に、かの宮女都より尋来るへき事、かねてよりしろしめされて、猶も機縁を觀せんかために諸弟子達に告たまひけるは、明日の暮かたに鬼神八人我を尋てきたりなは、佛法弘通のために鎮西のかたへおもむきぬるよしを答ふへしとて持佛堂に引籠りたまへは、諸弟子聞て驚愕し、上人たに恐まします鬼神等に、いかてわれく面をむかふへき、とやせんかくやせましと騒しかは、上人かさねての給ひけるは、我室内にあるうへはさのみおそれ

はなき事そと、しめししつめ給ひければ、いふかしなから師命にそしたかひける。さて和泉式部は容顔美麗の玉貌、楊柳の糸たをやかなる有さまも道の邊の露霜にうちしほれ、みるめあやなき風情にて、上人の庵室にたつねより、もの申さむといひなから柴の戸ほそをたゞきけり。もとより上人仰をかれしことなれば、諸弟子一所にあつまりて、かの女房をつくく見て、かく人倫遠き深山にかゝる女性のわけ入へきにあらされは、けにも鬼神の变化そとこゝろえ、上人は筑紫のかたへゆき給ふなり、いそぎ下向有へしとて、愛なく門戸をかたくとち内へはさらにいれさりき。

時に和泉式部伽耶山の月俄にかたふき雙林の花たちまちしほむ心地して女房達と諸共にしはらく門外にたゞすみしか、日すてに西の山の端にかくれ入あひのかね聲くく諸行無常のひゞきをなし峯のあらしは実もいま飛花落葉をしめしつゝ、鹿のなく音もすましく垣根のむしのかなしむ聲、こゝろもすめるおりふしに、深々たる庵室の内に寂莫無人聲讀誦此經典の妙なる御聲きこえければ、また立よりて門をたゞけとも、更にこたふる人なければ力をよはすたちかへり、露に袖をそほちつゝ松のひまもる月影のほのく見えしを打ななめ、一首をこそは詠しけれ

冥より冥道にそ入ぬへき

はるかに照せ山の端の月

となむ打誦して、せむかたなさのあまりに、くとき申されしは、上人にあひたてまつり後世の事をたつねまいらせ、浮世のやみをはれなむと、

数十里程を遠しとせず、是までたとり参りしに、むなしく帰む事のあさましさに、去は、女人は五障三従の罪ふかくして諸佛菩薩にもきはれ、八万の教益にも漏たりと聞時は、只今上人の他行なりたるも罪深き女人の来りし故ならむと涙にむせひたゞすみければ、上人ものこしをへたてこれをきゝたまひて、かれか一詠の趣は既に佛道を求るこゝろさしあさからず、我盡度衆生の誓ひをおこしなから彼を漏さん事も本意ならずとて、終に門をひらかせて式部に對面ましくける。

式部、上人に對面し優曇花の花まち得たる心地して婦命頂禮無上尊と唱へ、三度礼拝なし奉り申けるは、抑自は一條院の皇后宮上東門院の宮女、越前守雅致かむすめ和泉式部にてさふらふなり。はつかしなからかゝるよはひに及ふまで、たゞいたつらに光陰をくくりて、いまた佛道修行の心さしなかりし所に、近き比寵愛のむすめ小式部の内待にをくれ是を菩提の縁として浮世のちりをいとひ、上人の教化をうけ未來永劫をすくれまいらせむとのそみて、九重の都をはるくこれまで来り侍るなり。おなし女人といひなから、みつからはわきて罪障ふかくおほえたり。願は上人慈悲加祐ましくて五の障三の罪輪廻妄執の雲霧を一時にはらひきよめつゝ、快樂不退の寶國に往生すへき正法を、我にしめしたまへて五躰を地になげ懺悔申侍れば、上人つくくと聞たまひ、おもひいれたる心さしに感激し、墨染の袖をしほりたまひて、しはしは示しもなかりしか、やゝありてのたまひけるは、けに三界は夢幻のことく、六趣はさりぬへき所なり。たまさかに人身を得て値かたき佛法にあひなから、

一生をむなしくをくり待らは、いつかは生死を離るへき。其信心を退轉せず、はやく佛道修行を励みなは、速に生死を離む事、疑なし。さりながら、佛教多門にして八萬四千あり、是皆機縁不同なるにしたかひ、機々相應に利益を蒙らしめんかためなり。然るに今汝か問ひつる所は、往生極樂の一門なり。我も多年西方の行業を兼修すといへども、本意とする所は、一實の觀解なれば、弥陀教の利物はいまた自も分明ならず。爰に帝都の南、八幡山に示現まします大菩薩は本地則極樂の弥陀尊なり。結縁無窮のために、和光のちりにまはし給へは、彼社に詣て、一心に神慮を祈へし。誠の心をおこしなは、必感應あるへしとて、別のしめしはなかりけり。

(二行空白)

式部、上人のをしへにまかせ、彼山に参り、大菩薩の御寶前に七日七夜通夜申、丹誠を抽て往生の要路をいのりける。比は八月半なるに、皓々たる月の影、瀏々たる暁のかね、夜も明かたと覺しき時、八句計の老僧、忽寶殿より出現ありて、告たまひけるは、帝都誓願寺の本尊は、慈悲万行の菩薩、春日大明神の真作、西方浄土生身の如来なり。超世の大願に酬て、衆生を本国に導かむと、假に彼寺にあらはれましくて、毎日一度は、必西方浄土にかよひて、来迎引接したまへは、此本尊に帰依して禮拜称名畢命を期とすへし。妄想顛倒の男女までも、誓ひの中に入ぬれば、いかてか接取に漏るへきやとくく、参詣つゝ、往生極樂の直路を祈り奉るへしとて、かきけすやうにうせ給ひぬ。時に式部は彼愛道尼

の靈山會上にて、一切衆生喜見如来と記別を蒙り、八歳の龍女、文珠の教化によりて、南方無垢世界に成道なりぬる心地して、感涙袖にせきあへず、いそぎ當寺へ詣てけり。

(二行空白)

かくて式部、当寺へまいり、四十八日の間、籠り居て、無二の丹誠をこらして、二六時中専心に念仏し、偏に往生の要法を祈しかは、或夜の深更に、人の声もしつまり、燈の影かすかなる折節、式部しはらくまどろみけるに、靈壇より忽七句餘の老尼くたらせ給ひ、式部かそは近く立よりの、たまひけるは、汝我を頼む心さし眞実なり。往生の事は超世の願にまかすへし。夫往生極樂の教行は、必しも心をこらし、身をせめてねかふにもあらず。たすけ給へと思ふ信心堅固にして、南無阿弥陀佛と称れば、接取の光益にあつかりて、無明の迷闇を照すなり。殊に女人の往生は、三十五の本願にあらはれたり。彼韋提希夫人まのあたりに来迎を拜して、けからはしき女質をあらためず、其まゝ無生を證せるも、本願不可思議の利益也。是韋提一人の得益と心得へからず。願文分明に設我得佛十方無量不可思議諸佛世界其有女人聞我名字歡喜信樂發菩提心厭惡女身壽終之後復為女像者不取正覺と發誓す。末世の女人も、わか本願をたのみて一心に念仏せは、夫人の得益に同しくして、決定往生疑ひなし。相構て余願余行をさしをきて、唯一向に称念すへしとしめし給ふ。式部夢とも更におもほえず。歡喜の涙ながらに有難しと申、合掌禮拜し奉れば、老尼一首をそあそはしける。

阿弥陀佛といふより外は津国の

なにはのこともあしかりぬへし

唯此哥を心肝に治め、偏に我を頼みなは、来迎攝取は称名の声にしたかふへし。努々露はかりも疑心なく、名号を専念して聖衆の迎摂を待へきとの御告にゆめさめぬ。〈建久の比とかや、選擇集所製の後、法然上人当寺へ参籠ましくて、和泉式部此哥に感悟せしことを聞召て、我所製の一卷本尊の御詠哥に符合せりとて、殊に感吟し給ふとなん〉其時式部、是偏に弥陀如来の御示現なりとて、いと有難く思ひ弥陀攝取不捨の誓を仰き奉り、鳳闕夙夜のいにしへは、鸞鏡にむかひ紅顔翠黛のおもてをいろとり、緑髪をかきなて、容貌をかひつくるひ、衣裳綺羅をかさりとて、さもゆふなる女性なりしかとも、忽に浮世のちりをはらひすて、なかき輪廻のきつなをきり、菩提の道に趣き、持戒清浄の尼となり、法名を専意と号し、身には墨染の衣をまとひ、手には百八の念珠をとり、しきみの花闕伽の水、三業清浄に六時をつとめ、此寺の傍に柴の庵をむすひて住けるか、爰に小御堂の一室と申て、御堂の関白道長公御建立なりし一字あり。是を式部にたまはるゆへ、則寺内に引むすひ常に此字、「字」カに籠り居て、朝な夕な本尊へ詣し、外は更に室を出さりけり。かくて多年称名の功つもり、終焉時至りければ、紫雲軒にたな引、音楽天に聞え、瑞香四方に薫し、聖衆の来迎にあつかり、西刹にむかひ端座合掌し、念佛のこゑたえず、人王六十七代三条院御宇、長和三甲寅年三月廿一日に往生の本意をそ遂にける。

【巻四】

六十六代一條院の御宇。西國に一人の剛夫あり（俗名を失す）。常に五百餘人の悪賊をともし、海上に望ては客船をうかゝひ、商人の財寶を押し領し、山里にいたりては、往来の旅人をかすめ、金銀を奪ひ、山賊海賊のしわざ実に古の周処ともいひつへし。国民是を聞て案堵のおもひなく、驛路の往来も絶々に成とかや。或時彼剛夫財寶をかすめとらむために、此花洛に上り、當伽藍にやすらひけるか、もとより一念眞實の善心なければ、本尊を拝すへき心もつかず、何となく堂内にいりて、本尊を見奉るに、身の毛もよたちて、をのつから信心發起し、先非をあらため、千悔贖をかむて、なかく悪業をやめ、専心念佛の行者となり侍りぬ。かくて此志を妻子に告しらせむとて、本國に帰らむとせしか、本尊にわかれたてまつることをなけき、則かねをもて、一寸八分に尊容を寫し奉り、常に身にしたかへて恭敬せり。然る處に、彼徒黨、或日他のためにとらはれ、哮問難義にをよひ、彼剛夫盜賊の張本たるよし訴へしかは、一條院追討の宣旨を、藤原保昌にたまはる。保昌勇士を引率し、いそぎ馳下て、難なく搦捕て、洛中をひきわたし、寛弘五戊申年七条河原に引出し、誅伐せんとするに、忽太刀二つにおれ、其身つゝかなかりしかは、諸人あやしみ、事のよしを問待るに、彼剛夫答ていはく、我悪心を翻て後、ふかく誓願寺の弥陀如来を信仰し奉るによりて、かねをもて彼佛像を一寸八分に鑄たてまつりて、常に身をはなたず、一心に念佛す。此外更に別の子細さふらはす。若かやうの擁護にてもやあるらむと語りければ、

譬固の人く不思議のおもひをなし、取出して見るに果してたかふところなかりけり。見聞の縉素各奇異の思ひをなせり。時に保昌件の趣をもて、委く奏聞有ければ、主上叡聞ましくて、先に悪心を翻すといひ、剩不思議の感應にあつかるなれば、誅伐すへき者にあらすとて、死罪一等を赦免したまひぬ。

(二行空白)

かくて彼剛夫不思議の感應に預りしかは、いよく信心をまし、當寺にきて祝髮染衣して、常慶と号し、永く絹錦を捨て、五穀をたち身命を木食単衣に支へ、抖擻行脚をことゝし、苦行歳を積、万民をすゝめて、當寺の鐘を造立せり。其旨趣、具に銘の文に見えたり。しかのみならず、我が旧悪をおもひ出し、悪心貧より發れはとて、衆生の貧苦を救はんかために、則多門天の一像をきさみ、一度斧をめぐらしては三度礼拝し、一切衆生満足諸願と唱へ、三年の星霜をつんでいとなみければ、終に功をへ像なりて御堂の外陣に安置せり。

(二行空白)

一條院の御宇に當て、大織冠鎌足公十二世の孫、御堂の関白藤原道長公の御息女上東門院、先孝道長公の御為に、手つからみつから浄土三部經を書写あそはし、當寺に御參籠ありて、一七日精進加行し、讀誦称名をこたせたまはず、猶も仰願したまふは、弥陀慈尊嚴父の生所を我為に告知せたまへと、一心に祈誓ましくけるに、結願の曉更に至りて、まともみ給ふ御夢の中に、豎鳥帽子淨衣の装束を着したる一の男子、立文

を捧来れり。御夢こゝろに其来所を尋給へは、我こそ誓願寺如来の使者なりといへり。急きひらき見給ひけるに、文字うるはしくして、禪定嚴閑は下品下生にましますなりと云云。いかなればかゝる下品にはあますと問たまふに、使者答ていはく、先公の御在世に往生浄土の願心堅固におはしなは、左右なく上品上生なるへきを、志願懦弱にましくしかは、かく下品には入給へり。是もなを佛願威神力の故にこそといひしに、御夢さめ、悲嘆の御涙をもよほせたまひて、いよく御追善御心にそめ、四部の衆をあつめ、供養嚫嗟まめやかにして、上品往生を祈り給へり。

(一行空白)

沙門圓能は、大和國添上郡伏見の郷の人なり。十八歳にして信貴山にのほり、讀書日をかさね、学問年をつみ侍れとも、其功なくして常に弥陀を信じ西方の浄業を修せり。然に弘文院丈六の薬師如来、靈驗あらたなる事を聞て、一百日を限て参詣し毎日三千礼をなして誓ていはく、我願は現在に薬師弥陀の真身を拝し奉らんと云々。既にして第九十六日にいたり彼寺におもむく。路頭の曠野にをひて、薬師の真身虚空に偏満し、及弥陀の真身菩薩聖衆、同時に現し給ふを拝し身心歡喜し其後は跡を當寺にしめ、二六時中本尊を恭敬し禮拜称名をこたる事なかりき。かくて三年を経て行年五十七歳、久安三年三月晦日、俄然として死せり、衆こそりてこれを見るに、心胸の暖氣いまたさらさりければ、葬る事あたはず。二七日を過て、形骸を野中にくりぬ。しかれとも鳥獸ちかつきけかさす、形骸やふるゝ事なし。見聞の諸人あやしみをなすところに、同

年五月八日の巳の刻に忽然として蘇生せり。初は言語詳かならざりけるか、三年をすきて後、衆に向て語ていはく、我先年冥途におもむくに、六人の僧我を喚て空にみちひけり、我したかつてゆきながら、是はいつれの所にざり給ふやと問に、比丘答ていはく、閻魔王宮にむかひさるなりと。我いはく、ひさしく浄業を修して、西方に生せんと願ひぬ。今なむすれそ閻王所へゆかんやと謂て辞し去んとす。比丘のたまはく、汝まつ閻王所にゆきて有情の業苦を見るへし。次に極楽へ引導せんと、しかも我猶うけかはざりし所に、比丘かさねての給はく、しからは先浄土をおかませんとて、みちひき給ふと思ふに、須臾に極楽の東門にいたりぬ。さて門内にすゝみ、諸の宮殿を見奉るに、一一の宮殿みな七寶をもちて嚴飾し衆光彩を發して水上にあり。我不思議の思ひをなし、これ天人の所爲か佛力自在か、未曾有なりと嘆す。比丘のたまはく、是瑠璃地にして水にあらずと、我則手をもちて地を摸に、果して堅く手すこしもぬれず。時に我五比丘に申さく、弥陀如来のまします宮殿はいづれそやと。ひとりの比丘のたまはく、我まつゆきてこゝろみんとて、宮殿にいり帰り来り、五比丘と共に、我を殿内にひきひて告給はく、是は誓願寺の弥陀如来なり。汝多年彼寺に在て、一心に念佛し恭敬せる故に、爰に現しましますと云々。我これを押し奉るに、相好光明赫曜として十方をてらし、莊嚴殊妙なる事、言語を絶しぬ。既にして我即此宮殿にとまらん事を求るに、比丘のたまはく、汝はいそき娑婆にかへり五部の大乘經を書写し、猶も禮拜称名せば、此に往生すへしとて、それより地獄へいさ

なひましますに、八寒八熱受苦の衆生のありさま、言葉にのふる事あたはす。しかふして獄所を出ぬれば、六比丘のたまはく、汝我等を見知りたるや、我は誓願寺にある六鉢の地藏なり、汝に善惡の因果をしらせむために、こゝに来てみちひくなり、告たまふに、夢のさむることくしてよみかへり侍るなりと語りぬ。それよりのち数年のあひた四衆をすゝめ金字五部の大乘經を書写して金峰山におさめ、いよく精進に念佛して、仁平元辛未年正月廿四日午時四部の衆に無常の到る事をつけ、沐浴し浄衣を着し結伽趺座低頭合掌し、佛菩薩の來迎を押し奉り、正念に終をとけたまへり。時に音楽空にひゝき異香室に薫然たり。洛中の道俗供養のためなれはとて十日餘までとめをきぬ。さて舟岡山に葬るに路すから四衆妓樂をしらへ浄土の縁を結ひけるとなむ。

(一行空白)

人王八十三代土御門の御宇、承元三己巳年四月九日に災炎俄におこりて紺宇残らず回祿せしに不思議に本尊はすこしも恙ましまさざりしかは、衆挙て是をよるこひ、まつ假殿をつくり、しはらくこれにうつしたてまつる。爰に伊勢の權守為家多年貧窮に苦しみますまひ侘しくよろつ心にかけたりければ、あけくれこれを歎き、いかにもして財福をもとめまほしくおもひ、年月をかさねて城北の鞍馬寺へ詣て祈誓しけるか、或日彼寺へ詣てんと欲して當寺の門前をすくるに、折節時雨にあひ、しはらく本堂の外陣にやすらひ居ける所に、歩行のつかれにやそとまどろみける中に、多門天示現ましまして告たまひしは、汝なんそ遠く城北に詣てぬる

そや、我は是鞍馬の多門天なり、此道場を守護せん為に、一躰分身して常に此外陣に住す。汝今より後は此御堂に参りて、一心に本尊を禮念すへし。弥陀を念する衆生をは、我日夜に隨逐影護して、安穩ならしむ。

我ひとりかくのごとくなるのみにあらず、梵釈諸天皆もつてしかれりと示したまふとおもふに、夢さめければ、奇異の思ひをなし、住僧に對してことよしをたつね侍るに、住僧答て、是こそ多門天の形像なりとさしをしへ、昔常慶上人一刀三禮して此像を彫刻せし因縁をしかくくと語りぬ。時に為家、靈夢にたかふ事なかりければ、信感骨に徹し、それより後は示現にまかせ、鞍馬の参詣をやめ、偏に當寺へ歩を運ひければ、終に信仰の功あらはれて、福祿榮耀願ひのごとくにそなり侍る。然る處に此為家情當寺の回祿を悲歎し、ひそかに思念しけるは、我かくのごとく富さかゆる事、偏に是當寺の御本尊并多門天王の御利益なり。しからは報謝の曼乙をこゝろさして、豈此時に當て財をなけうち、再建の助成をなさらんやとて、まさに大願を發し、件の意趣を上奏し奉るところに、他にことなる利益にあつかるうへは、丹誠を抽て再興すへきよし勅許ありしかは、資財をなけうち、土木の功をいとなみ、自其事を下知し、やかて舊制に復し畢。是によりて其子孫為家為忠代々當寺の檀越となり、家門永く繁榮し侍りぬ。されは积尊王宮にをゐて、韋提のために極樂の要門をひらきたまへは、釋梵護世諸天空中にあらはれましくて天花を雨し供養したまひ、又良忍上人融通念佛を勸励ありしかは、多門天王冥官冥道其数にいりぬる事を告たまひしも、かゝるためしなるらん

といとありかたくおほえ侍りぬ。

【卷五】

夫十宗の教法、我朝に興る事、皆機縁に隨て前後一準ならず。就中淨土の正宗は、佛法最初、聖徳太子の時より、これある事をしり、然して太子入滅の後、二十箇年を経て、舒明十二年庚子夏五月初の五日に慧隱法師詔を奉て、慧賢法師を問者として、宮中に無量壽經を講論し給ひしより以來、諸宗の碩徳、各本宗にして兼て淨土の法門を弘通し、自行化他、往生極樂を旨としたまふ事、傳文に載るところ枚挙せるにいとまあらず。然りといへとも、法然上人以前は、淨土の宗号もいまた立す、本願念佛の深義も、分明にあらはれさりけるに、承安年中に、上人吉水の蓮苑におゐて、夢定の内に善導大師半金の靈相をしめし、淨土の要義を一々に指授ありしよりのち、三國相承の淨宗さかむに、我朝にひろまり日本國中、大半其化にしたかはすといふことなし。されは當寺は 天智天皇の御願にはしまり、惠隱法師を開祖として、開關のむかしより、もはら西方の教行を闡揚すといへとも、法然上人徳行のたかきにより、且時々参籠ましくて、結縁あさからさりけるゆへ、寺主藏舜上人淨土宗義に帰したまひ、それよりしてのちは、法然上人を宗祖とあふき、證空上人圓空上人あひつきて、この寺にして淨教を弘傳したまへり。

(二行空白)

嘉禎二年の春九條の相國道家公當伽藍にをいて、七日の佛事を営みたま

ふに證空上人を導師と仰き、兼て法施結縁のためとて、毎日唱導をそ請したまひける。其所説の法門は、觀經觀音觀の其餘身相衆好具足如佛無異唯頂上肉髻及無見頂相不及世尊の金文を擧られ、師徒位別に果願いまた圓かならざる事を表して、二相佛に及はずといへとも因地の菩薩なを

赤肉髻の相をそなへましますに、當寺の本尊此一相を虧給ふ事、實に殊勝の趣なりとて、彼當麻曼陀羅中央の本尊に肉髻の一相を織給はざる事を對辨し、弥陀如来の本誓大悲深重の功德を讚嘆し給へは、參詣の貴賤希有の思ひをなし、聽聞の緇素歆喜の涙を催しける。爰に上人の門弟性達房、其夜佛前に籠居ありしか、深更に及ひ人うちしつまり、心の水もいさきよく、佛のかけやとさむと、静に念佛せられけるに、いつの程よりか詣てけむ、籠れる人多かりし中に、粧ひ異なる老尼二人、なつかしく居よりてあひかたる。何ことにやと訝り聞に一人の尼、扱も今日の唱導は、殊に有難く覺え侍ぬといへり。又一人のいはく、我むかし當麻寺にをいて、浄土の曼陀羅を感得せし時、彼化尼繪相の理を一々に説示し給ふ趣、今上人の教勸と聊たかふ事なし。去は織女は、恭も西方教主、左面の菩薩、春日明神の本地、又此上人もおなしく觀音大士の化現なれば、一軀身の理り、誰か信受せざらんやとて、曼陀羅出現の由来、刻をうつつして語りける。かくて漸あけほのいたりぬれば、両尼本尊を拜し奉りて、かたへの人に別れを告、すてに堂内を立出ぬ。性達といふかしく思ひ、内陣より馳走して両尼はいつちよりまふてたまひ、いかなる人そととひ侍るに、一人は法如、一人は專意と應て、西門の方へさら

れける。如法は中将姫の佳號、專意は和泉式部の法名なれば、性達猶も不思議に思ひ、両尼の跡をしたふに、西のそら霞ともに見失ひぬ。あらかたかりし感應なり。

(二行空白)

一遍上人。字は智心伊豫の国河野七郎通廣か二男なり。小字は松壽丸と号す。幼稚の時より、をのつから仏乘をしたひ、出塵の志しありき、是に依て父母許て出家せしむ。初は天台の教觀を学はれしか、源空上人西方の化導專修念仏の利益甚深なる趣を信し、十八歳にして、西山證空上人の門弟性達上人に帰依し、浄土の章疏を稟學ひ、他力念仏の安心疑ひなく、往生極樂の想ひ決定せり。こゝにおゐて頻に弘法利物の悲心を發し、諸國に遊行し、あまねく念仏をすゝめむと欲し、すなはち師の聽許をうけて發行せられける。爰に熊野の神は、本地西方の教主、和光擁護の結縁もいとたのもしくおもほえて、先熊野宮へ參籠ありき。上人の德行盛實にして、利生の悲願淺からざりしかは、すぐる所の郷里、休ふ所の市廓にいたるまで、男女道俗をわかす、皆渴仰の心をかたふけ、念仏の勸化に随はずといふことなし。既にして紀州熊野にいたり、青巒の岬々たるをみては、神徳の高き事を仰き、滄海の漫々たるに臨ては、弘誓のふかきことをおもひ、嶺の恣風吹落ては、無明の睡をさまし、音なし河のきよき流には、煩惱の垢をあらひつへし。かくて本宮證誠殿に詣て、仰ては本地の悲願をたのみ、俯ては和光の擁護をもとめ、七日七夜一心に念仏して、法施精誠をつくし、神慮の感應を折られけるに、満夜の暁

更にいたりてうちまるとまれしかは、神殿の戸ひらをのつから開き、白髮の聖僧、長頭巾をかけ、堂々として高臺に移りたまふ。又傍をみれば、山伏三百人あまり長床になみ居、をのく威儀を敬て高臺を拜せられける。上人、さては権現のあらはれさせたまふと、渴仰の首をかたふけられしに、高臺の聖僧やかて上人の面前に來りすゝみ告たまひけるは、余はこれ西方浄土の教主なり、濁世の衆生を愍か為に、光をわりて、有為の塵にまははり、あとをこの山に垂て諸の衆生にちかつき此世の願をみため、縁を貴賤にむすひ、終に無漏の寶國に導かむかため也。然に上人念仏弘通の心さしふかく、我ちかひにかなひ、我化をたすく。實に末法の導師、利物の智識なり。これより急き洛陽誓願寺に詣て、有縁無縁を扱はす、普く念仏の符をさつけ、自他同生の悲願をみつへしとて、四句の偈をのへたまへり

六時名号一遍法 十界依正一遍體

萬行離念一遍證 人中上々妙好事

(二行空白)

神託の偈文義趣深玄なるへければ、凡慮の測るへきにあらすといへとも、誠に偈意の一邊を解するに、一の句は上人所修の法也。二の句は上人の色身、三の句は上人の證道、四の句は人中上々の徳を具へます上人なる事を歎美したまふにや、就中第二の句に、十界具足の身軀といふこと、ひとり此上人のみの徳にあらず。いかむとなれば、十界互具は通して十界各具の義なればなり。然に今上人の徳としたまふことは、十界各具な

れとも、表裏明昧の異ありて、人天四趣は凡悪を表とし、裏に四聖の理を具すれとも、その理暗昧なり。四聖は六凡を裏とし、聖を表とし、しかも聖の徳明朗なり。此聖人、全聖の徳には有へからすといへとも、分聖も具徳あるか故に、從て所歎としたまふなるへし。第三の句の萬行離念と云ふは、猶念佛離念といはむかことし。念佛は萬行の中の一行なれとも、万行は念仏の所具なる故に、念佛離念を萬行離念といふなるへし。されは上人踊躍歡喜の念仏前後際断し、内に能念の心なく、外に所念の境なく、能所両なから念したるすかた、全く無念の念佛なり。上人證入の道徳なるゆへに、辱も権現これを称美したまへり、即上人の詠哥に

唱ふれば仏もわれもなかりけり
なむ阿弥陀仏のこゑはかりして

(二行空白)

第四の句は、觀無量壽經に若念佛者当知此人是人中芬陀利花と、念佛の行者を佛歎したまふ言なり。善導大師此文を、五花を出して釈したまふ。其中に第四の人中上々花と、第五の人中妙好華との二句をあはせて、今の結歎としたまへり。凡もろこし一百餘家の師々の解釈の中に、大師の釈文を引用し給ふ事、誠に奇特の神託なり。抑本宮の権現は、弥陀如来の垂跡、善導大師も亦是弥陀佛の應現なれば、かの疏は則弥陀の直説なり。本迹ことなりといへとも、化導維おなし。證驗此偈にあらはれたり。仰くへく敬へし。上人件の瑞夢を蒙り、心肝に銘して神殿を拜し、首を挙て左右に見そなはずに、十二三はかりの童兒一百餘人、手を捧來り、

我等も上人の念佛を受むとて、異口同音に南無阿彌陀佛と唱へて、いつちともなく失侍りぬ。是神の眷属、上人の化を助むとて、あらはれたまふにやと、いとたうとくおほへ侍り。又上人を一遍と号する事は、権現の勅賜なりとぞ。

(二行空白)

上人神勅にまかせ、いそぎ花洛へのほられける。比は建治二年の春なり。既に當寺へ参籠ありて、六時の淨業を励み、一心に念佛し、諸人に名號の符をあてて、念佛をすゝめられしに、自行化他、たうとかりけるさまなりしかは、都鄙遠近を論せず、道俗男女をわかす、肩をならへ踵をついて、日夜に群集し、念佛の符をうけ、往生淨土の結縁をそなし侍りぬ。或日参詣群集の中より、優なる女人、上人の前に進み申せるは、授たまふ符を見奉るに、六十万人決定往生とあり。然らば其外の衆生は、撰取の利益に漏るへきや。上人宣く、弥陀の悲心無尽にして、横には十方をきはめ、豎には三世を尽し、善惡一切の凡夫乃至三塗重苦の衆生までも、普く済みます、廣大無邊の誓願なれば、いかて六十万人に限るへき、但し此符の文は、神託の四句の偈の一字つゝを摘て證明のために題するのみなり。只すへからく決定の信をいたして、他念なく念仏したまは、佛の本願に稱ひ、往生いと速ならんと示したまへは、女房歎喜の涙をなかし、さては吾儕のやうなる罪深き女入まで、往生更に疑ひなし。有難き御利益とて、掌を上人に合せ、念佛しけるか、良ありて又申けるは、此御堂の正面に誓願の寺額あり。此外に上手つから六字の名号を書添

させたまへ、これ私の願にあらす、辱も本尊の御告なりとぞ。上人奇特のおもひをなし、扱女房は、いつちの人、其名はいかにと訪待るに、女房のいはく、あれにみえさふらふ御堂は、八曼陀羅堂と号し、又御堂の関白御建立なれば、小御堂とも称く。これ我が往生せし室なりと云ひ畢て、いつちともなく失侍りぬ。

(二行空白)

上人扱は唯今の女人は、過にし和泉式部、如来の御使として、西方より應現せるよと感信し、御告といふにまかせて、六字の名号を拝書し、則堂上にのほせ、寺額にあひならへて至心に敬礼し、念佛刻を移されしに、倏ち異香堂に薫し、瑞雲檐に鬩き、陰々たる樂昔の中、奇光の照し来す方を見れば、金影の弥陀、雲中に立たまひ、菩薩聖衆前後を圍遶し、和泉式部も共に相従て影現せり。彼大江の定基もろこしの杭州におゐて、終をとけるとき、まのあたり来迎を感じ、即一絶を擧していはく

笙歌遥聽孤雲上

聖主來迎落日前

また和哥に

雲の上に遥に樂のをとすなり

人やきくらん空耳かそも

かく吟せし事、實にさありつらめと、いとありかたくそおほえ侍る。謹案するに、本尊上人に告命して、名号を寺額にならへしめ給ふ事、聖意はかりかたしといへとも、恐くは弥陀本願の念佛といふにつき、その正

旨をあきらかに諸人に顯示し、惑はさらしめむためにや。いかんとなれば、本願の念佛は、口称の名号にあること、三經の本意なりといへども、又は執見に隨て隠れ、義は機根を遂て顯るゝなれば、和漢の諸師、或は弥勒問經に准して、慈等(みじか)の十念と得、或は隨地の施設をとりて、觀念の念と得られしを、善導大師、弥陀の化現として本願の要義をあらはし、第十八の願文を称我名号下至十聲と釋して、みづから本地の願意を示し給へり。是に依てこれを思ふに、今本尊の御告いよく、弥陀の本誓願は、口称の行跡、南無阿弥陀佛なる事を勸励したまはんとこそ。

(六行空白)

此花洛に南帝王の孫裔いまそかりける(謙してつゝみにその嘉名をあらはさす)。戒急にして高姓の身を受たまふのみにあらず、乘猶急にして深く世は常なき事をさと、朝には経を誦し、夕には佛をとなへ、とこしなへに涅槃常樂の妙果をのみ志し求め給ひき。既にして或一日密に家弟を招て宣ひけるは、情世間の転変を案するに、八相苦焼の境界なれば、しはらく菩提を安すへきに非ず。縱令王位自在の身あるも、親疎の中に恒に疑懼の憂を懷き、衰滅時なふして至れば、劇苦下残にことならず。それよりして下降、后妃臣民誰か実の樂みあらんや、愚者の愛樂は智者の厭惡する所なり。吾今不惑のよはひになんくとして、餘命の定なき事をおもふに、速に跡を煙霞に晦まし、身を仏陀に帰投せむ事を佛す。されば數教多門なれとも、いつれも皆觀心得悟の法門なれば、吾儕下根無智の通入すへき道にあらず。弥陀一教のみ末代に縁あるなれば、我淹

して天智聖主の叡がんと追感し靈驗あらたなるに信歸して、偏に願を誓願寺の如來に繫たり。今既に機縁相熟するにや、今夜頻に彼寺に入て、如來前にして剃髮受戒し沙門の身となり一心に往生淨土の願行をみちなむと思ふ也と有しかは、家弟隨喜して宣ひけるは、吾儕も年來終に願心を貯へ發心修行の志し切なりといへ共、君のこころを測り闕て、いまたその本意を遂さりき。さあらは、我も共にあひしたかひて、同因同行の身となり、二世の昆弟ならむと、終に應永十七年の春、齡三十六歳にして、当寺に參籠ましゝて、住持衆僧にも案内なく、供奉の面々にも告知せ給はず、連枝一時に髪を落し、染衣の身となり、堂内に籠り給へは、供奉の人々、愕き歎きあひけれ共、二心なきありさまを見奉り、各涙をもよほし、あはれに貴き遁世哉と、なくくあるしなき館へ歸り侍り。又、家弟は寺主道禪上人に法名をうけ、宗玉となむ申侍り。年をかさねて真阿弥陀佛に隨ひ、專淨業を修し給ひけるか、微疾を感じ、瑞相ありて遷化したまふとぞ。

(一行空白)

既に出家の本意を遂させ給へとも、法名ましまさねは、明なは、寺主人にまみへ授りなむとおもひ、其夜は御堂の傍に念佛してうちまところみ給ふに、本尊まのあたりに現し、真阿弥陀仏と唱へたまふと思に、夢さめぬ。さては佛我名を授たまふと感喜し、それよりして後、渴仰のおもひいよくふかく、菩提のこころさしますく至り、行住坐臥一心称名の外、更に他事なく行ひすましておはしければ、諸人のたうとみ浅からず。歸

依結縁のともから、いと多かりける。此上人智徳すくれますにあらされとも、唯道心堅固に行徳殊勝に侍れば、人々信教うし求すして、利益も廣かりける。實道徳の貴き事茲にをいて信をとれり。

【卷六】

普光院殿（將軍義教）、當寺の本尊を信仰ありて、時々參詣したまひけるに、又眞阿上人の道徳をたふとひ、後世の事をなん尋たまひき。或日犯科人ありて、既に死刑に究れるよし、其聞え侍りければ、上人哀みを垂れ、赦しを大樹に請ひ給ふに、重罪のおこなれはとて、更に許容なかりけるに、上人

慈悲の目ににくしと思ふものそなき

科ある身こそ猶あはれなれ

と詠して立給ふに、上人の頭背に忽円光あらはれ侍れば、大樹和哥の理に伏し、円光の不思議を感じ、座をたち衣の袖を引留て、五躰を地になすく、帰依尊敬ありて、面会の度に十念をこひうけたまはすといふことなし。かくて當寺の内、幽奥の地に就て、別に一院を建立し、上人にまいらせんとありしに、上人かく

萩をかき松をはしらに柴の庵

かせはふくともさひしからめや

大樹いと殊勝におほして、當寺の奥、古墓の傍に、一字を営み給へは、

上人此所に引籠り、不断念佛を勤行したまひける。此寺を十念と号する事、大樹十念をうけたまひしより、勸建ありし寺なればなり。

（二行空白）

上人在世の比、相國寺に心了西堂とて、智道めてたき納僧いまそかりける。應永十九年の冬、俄に氣疾を感じ命脈いと危く侍れば、門葉こそつて醫療を用ひ行ひしかとも、つゆ効もなくて、つゝに息絶侍りぬ。しかあれとも暖氣いまたさらさるゆへ、茶毗に及はすとらん

（三行空白）

既にして三日の後、よみかへりて相語られるは、余黄泉に趣き渺々たる曠野を通るに、即一字の金堂を見る。中央に所座の金蓮のみありて、能座の佛まします。左右の花臺には二菩薩相好儼然として立給ふに光明照耀たること、言の盡へきにあらす。余中臺の空しきをいふかりおもひ、彼金堂に一人の老僧いますにたよりて、其謂を訪侍るに、是は南瞻部州日域花落誓願寺に、眞阿弥陀佛といへる念佛の行者あり。娑婆の報命つきてのち、此中臺に移りたまふと語りき。又遙に林下を見るに、かた斗なる庵あり。彼は誰人の棲やらんと尋侍るに、あれこそ汝か生所よといへり。余生年禪定の修行おこたりなく、多聞智恵亦眞阿に劣るへきにあらす。いかなれはかく生処の浅猿侍るやといふに、老僧のいはく、禪定の行妙ならさるにはあらす。唯修し得る人の希なればなり。自力の行者中には、ケ程の處にも階ふへきにはあらされとも、汝猶坐禪の修徳あるにこそ、又汝か定業いまたみたす早く閻浮に帰るへしと宣ふに、忽

に蘇生し侍りぬといへり。

(二行空白)

それより急き当寺に詣て、良久しく佛前に念誦ありて、即真阿上人にまみえ、十念授りなむとこひ侍るに、上人のいはく、西堂は智徳世にすぐれ、観行人に超へましませは、吾儕いかてか此義に及へきとて、固く辞したまひき。西堂のいはく、我真路に趣き、上人当来の果報いみしくおはしけるを見奉るにより、同生安養の縁を結はむと、こゝに來り侍るなり。先十念を授たまへ、仔細は後に演なむと頻りに請し、十念をうけ事の始終をそ語られける。又西堂申されしは、我久しく禪門につめて活則提撕し、單傳直指の旨を悟らまく欲し、いまた曾て心を浄土の法門に措す。望らくは、今上人安心の要義を委く示したまへと。上人のいはく、予少か(つ)つし時より發心修行のいまに至て終に往生極楽の志願をたくはへ、或は智識に問ひ、或はみつから窺ふに、浄土の法門深妙難思にして、いまた其奥義をしらす。しかはあれと弥陀佛の悲願は、自の智解をもつて、往生するにあらず。唯信佛の因縁に依て專佛名を唱へ浄土に生せむと求れば、佛の誓ひにひかれて、無漏の国に生れ侍るなり。是故に予ひとへに弥陀佛の大悲を仰き、造次顛沛一心に彼佛の号を唱ふる外、更に他なしといへり。西堂此詞に感悟し、速に自力の觀解を措て、專修念佛の行者となり、賀茂山の麓に草菴をしめ、本意のまゝに往生し給てけり。

(三行空白)

上人念佛の功積り、運心年を累、年ついに永享十二年秋七月二日六十六

歳にして、往生の素意を遂給に、兼て死期をしり、其日に至りて剃髮沐浴し、佛前にむかひ拈香散華端坐合掌し、高聲念佛刻を移して睡かこと終をとり給ひぬ。時にあたりて異香室に薫し、妙華空に飄りて、瑞祥掲焉たり。これ聖衆來迎のゆへとそ、諸人たうとみあへり。又上人終りに臨て門弟にいへらく、我屍を水葬して、魚鱗の餌食にあつへしと。門人遺命にまかせ、下鳥羽の淵になむしつめける。また其日に及て聖衆來迎ましませは、貴賤まのあたりに感見し、随喜の涙をそなかしける。それより後、彼處を真阿か測と名付、いまに殺生禁断にてそ有ける。

爰に應永の年、洛陽に郷の大夫貞氏といへる人侍り。元は出羽の国、田河郡の産なりしか、総角の比より都になん住ける。夙善の催しけるにや。早く生死無常の理を覺り、世路の営み露心にかけす。穎敏にして美譽ありしかとも、世のあらゆる文字伎藝はみなこれ如幻無益の業なりとて、聴も習学ひす。唯後世菩提の事のみふかく思ひとりて、葷酒魚肉を断、香花礼拜の外、世事を離す。曙晚称名をなんつとめ侍りき。殊に当寺の本尊をたうとひ、日夜歩をはこひ本尊を押し奉ることに身毛為豎不覺の涙袂をうるほし念佛する事頻なり。既にして嘉吉二年秋八月十四日の夜夢見らく、齡七旬餘りの老僧告てのたまはく、汝我か浄土を慕ひ、我誓願を信する事至りて深し。一念の称名猶大利を得、況多年の称名をや。今浄業正に成せり。明なは則引接すへし。われはこれ誓願寺の本尊なり。久しく我を頼むかゆへに、來りむかふと示し給ひぬ。貞氏如来の應現心に銘して有かたく覺え、久客の故郷に歸る思ひをなし、やかて洗浴し浄

衣を着、香を焼、端坐合掌し一心に念佛して、佛の來臨をそまち居ける。

第二卷

かくて午時にいたり、紫雲空にたなひき、天華交下り、佛菩薩の光明室

巻頭同六年仲春

内にかゝやき、竟に行者を撰取し、西方に去給へり。家内の男女をはし

人王五十代

め、往還の貴賤まのあたり此嘉瑞を拝み奉て、未聞不思議の往生かなと、

人王六十代

歎喜の涙を流しける。抑往生浄土の一門は、此穢質を捨て後、淨身を受

叡山横川

るならひなれとも、衆生の機縁萬品に、如來の利益難思なれば、肉身を

清原深養父

捨すして、直に蓮臺に生するの類亦なきにしもあらず。されは西域の古

第三卷

傳に、現身往生の人を載せ、晨旦には法道和尚、本朝には勝尾の善仲善

巻頭六十六代一條院

算等、いづれも現身に極楽に生したまへり。是に依て今をおもふに、貞

時に和泉式部

氏現身往生の事蹟も聊か疑ひなく、いと有かたくこそはへれ。

式部上人の教に

かくて式部

第四卷

洛陽誓願寺縁起目録

第一卷

巻頭

勸修寺宮濟深法親王

抑當寺は

鷹司前関白房輔公

かくておつとの

近衛右大臣家熙公

爰に天智天皇

蓮花光院大僧正道恕

時に天皇感應の

梅小路前大納言定矩卿

既にして

葉室前大納言頼孝卿

月年の友

嘉禎二年

清水谷前大納言実業卿

一遍上人字は

庭田前大納言重條卿

神託の

梅小路宰相共方卿

第四の句

清閑寺一位熙房卿

上人神勅に

藤谷中納言為茂卿

上人扱は

清閑寺大納言熙定卿

此花洛に

風早前中納言実種卿

既に出家の

大炊御門前右大臣経光卿

第六卷

巻頭普光院殿

一乗院宮真敬法親王

上人在世の比

大覚寺宮性真法親王

既にして

竹内三位維庸卿

それよりいそぎ

裏松前中納言意光卿

上人念佛の功

飛鳥井宰相雅豊卿

爰に應永の

近衛関白基熙卿

右縁起筆者三十六人各録

其名因為考證

兵部大輔藤原貞維